

現金は危険？ 江戸の資産運用の実態と背景に迫る

文・高槻泰郎

江戸時代の人々は、現代の私たちが思っているよりも、
お金に関する優れた知恵や能力を持っていました。

日本人は投資に消極的？

日本銀行が2021年6月に公表した「資金循環統計」の速報値によれば、家計の持つ金融資産は約1946兆円ですが、内訳を見ると現預金が約1056兆円に対して株式や投資信託の保有金額は約279兆円（いずれも2021年3月末残高）。家計が持つ金融資産は、現金ないし各種預金が過半を占め、比較的风险性の高い株式等の保有額を大きく引き離していることが分かります。

このことから、日本人は投資に対して消極的である、といった評価がなされることもあります。はたして「日本人の特性」と理解してよいのでしょうか。江戸時代の人々を見てみると、少し違った様相が見えてきます。もちろん、江戸時代について同様の統計を示すことは難しいのですが、江戸幕府から庶民に至るまで、資産運用（当時の言葉では「利殖」ないし「貨殖」）に深く関わっていたことを示す証拠は多く残されています。

そこで今回は、比較的大きな商家や江戸幕府・諸大名を中心に、次回は庶

民を中心に、それぞれ資産運用の実態について紹介していきたいと思えます。

米切手という金融商品

「大坂の商家は、『遊び銀』を蓄えておくことはしないものだ。諸方面に貸付けて、その利息で妻子を養っている。したがって、お金を持っていたとしても、多くの場合、それは証文の形で持っている」。

〔草間伊助筆記〕『大阪市史第五』より現代語訳

これは大坂の豪商・鴻池屋善右衛門に長きにわたって勤務した草間直方（1753・1831）が残した手記に書かれている文章です。「遊び銀」とは、読んで字のごとく、何にも使われず、遊んでいるお金で、大坂の商家はそんなものは持たないのだ、と言っています。ではそうしたお金を何に使うのか。ここでは、貸付けに回して利息を得ているとありますが、ほかに信頼できる両替屋に預けたり、金融商品に投資したりする選択肢もあったことが知られています。

金融商品の中でも、特に大坂で盛ん

※江戸時代の大坂は「大坂」、近代以降は「大阪」と表記しています。

に売買されたのが、米切手こめきってでした。ご存知の通り、江戸時代の年貢は原則として米で納められました。諸大名は、その米を大きな市場で売却し、そこで得た現金で財政を切り盛りしていました。なかでも、当時最大の米市場が大坂にありました。

大名は、国元から廻送した米を大坂に設置した蔵屋敷くらやしきに格納した後、入札によって米を売却しました。その際、落札した商人に渡されたのが、米俵ではなく、米切手という証券証券だったので。

米切手は、1枚あたり米10石（重さにして約1.5t）との交換を約束するもので、これはどの大名が発行した米切手も同じでした。米を落札し、米切手を受け取った商人は、これを蔵屋敷に提出すれば、米俵を受け取ることができましたが、多くの場合、その米切手を転売しました。その転売市場こそ、歴史の教科書でもおなじみの堂島米市場どうしまいしちでした。「米」市場といえながら、内実は「証券」市場だったのです。

肥前蔵米切手（佐賀藩が発行した米切手）



（出所） 神戸大学経済経営研究所蔵

米切手は、いつ、誰が持参しても、発行者である諸大名の蔵屋敷が米を渡してくれる便利な証券証券でしたので、米切手を人に売ったり、人から買ったり、ということが堂島米市場を通じて盛んに行われました。

「現金を持つているより米切手を持っていた方がいい。」（大坂米売買之大意）『古事類苑産業部二』より現代語訳
このように述べる史料もあるぐらい、大坂では盛んに取引されたと伝えられています。ではなぜ、現金より米切手の方がいいと思われたのでしょうか。

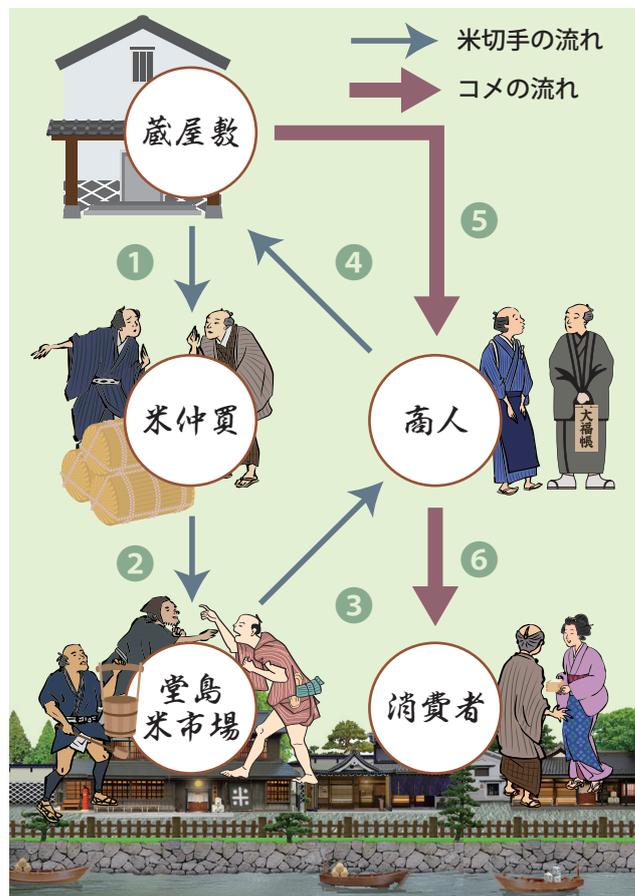
現金は危険？

大坂に設置された半官半民の学校・懐徳堂かいとくどうで英才をうたわれた山片蟠桃やまがたばんとう（1748・1821）（注1）は、その著書『夢ノ代』ゆめのしろで以下のように述べています。

「米切手で持つておけば、米の運送費で劣化したりすることもない。火災が発生したら懐ふとろに入れて走ればよいから、非常に便利である」。

米切手の利便性は、ここに書いてある通りです。米俵に換算して25俵〜40俵もの米を1枚の証券で保有できます

堂島米市場における取引の流れ



（出所） 著者作成

し、鼠に食べられる心配もありません。火災のときには持つて走ればいいわけですから大変便利です。

火災の話題が出ましたが、現金で持つことの泣き所の一つが、こうした火災による被害です。江戸時代は火災の発生頻度も高く、また類焼範囲も広がったので、火災が現実的なリスクとして認識されていました。自宅で現金を保有していると、火災のときには担いで運ばねばならず大変です。その点、米切手にしておけば、持ち運びが簡単です。また、今も昔も、盗難に遭う危険があります。私が分析を進めている大坂の豪商、加島屋久右衛門かじまやきゆうゑもん（注2）（NHK朝の連続テレビ小説『あさが来た』の

モデルになった家です）も盗難に遭っています。享和3（1803）年の春、大坂の富豪を狙った盗みが多発したそうです（大阪市史編纂所編『大阪市史料第二十四輯』しゅう 大阪市史料調査会、1988年、69頁）。手口としては、土蔵の屋根を切り抜いて忍び込み、衣類や道具類には目もくれずに金銀ばかりを盗むというものだったようです。

被害者として、唯一具体的に名前が挙がっているのが、この加島屋で、「玉水町加島屋の土蔵きりぬき、金子四千三百両取り申し候」とあります。この金4300両を当時の相場での米の量に換算すると4750石、米の重量にして700tを超えます。1

両を約6万円と見なすと(注3)、約2億5800万円に相当します。驚くべきことに、この金額は加島屋の資産総額の1%にも満たないので、加島屋にとつてさほどの打撃ではないのですが、現金で持っていることの危険性は、こうした事例からもうかがえます。

「利殖」は正義なり

遊んでいる現金を持つておくことは無駄である。そもそも現金保有には危険が伴う。このように認識された江戸時代には、人にお金を貸したり、米切手を代表とする金融商品を買ったりすることが盛んに行われました。そしてそれは、商人に限った話ではありませんでした。

全国の鉱山から金銀銅が盛んに掘り出された江戸時代初期、江戸幕府の財政は比較的安定しており、備蓄金も相当な金額にのぼっていたのですが、江戸時代中期になると、米価の低落もあって幕府の財政は苦しくなっています。大名も例外ではなく、米頼みの財政では立ちゆかないことが認識されるようになりました。田沼意次が権力を握った18世紀中頃には、幕府においても諸藩においても、支出を少しでも削減し、収入を少しでも増やすことが「正義」と見なされました(藤

田覚『田沼意次』ミネルヴァ書房、2007年)。

「そこで注目されたのが米以外の商品作物である…」と皆さんは日本史の授業で習ったかも知れません。それは間違いではないのですが、実は「利殖(貸殖)」も盛んに行われていたことを見落としてはいけません。しかも、その手法は実に巧妙です。

幕府の手法を例にとりましょう。

① 出資者である商人から江戸幕府がお金を借り入れる
② そのお金を再び出資者に貸し下げ、彼らによって大名や裕福な農民・商人に貸し付けさせる

③ 得られた利息を出資者と分け合う
という形が広く行われました(高槻泰郎『幕藩領主と大坂金融市場』『歴史学研究』2012年)。

かなり複雑ですね。そもそもなぜ江戸幕府は民間にお金を借りてから、また貸し下げるといった形をとったのでしょうか。こうした手法は、民間のお金を江戸幕府の「公金」に変換する効果を持ちます。「公金」を貸すわけですから、回収の確実性は高まります。「これがどういってお金か分かっていますよね？」と相手にプレッシャーをかけることができるからです。相手が商人であればもちろん、大名であっても効果はてきめんです。回収の確率が上がる

なら、出資した商人にとつても悪い話ではありません。

商人のお金をいったん幕府が借り入れて、それをまた貸し下げることによって、「葵の御紋」付きのお金に変換してから、商人を通じて諸方面に融資させる。その運用益(年利で10%弱)は、出資者にも分配されますが(約7%)、名前を貸した幕府も、いや、名前を貸した「だけ」の幕府も、分け前を受け取った(約3%)というわけです。「武士はお金に疎い」とよく言われますが、そのイメージだけでとらえてしまうのはどうやら危ういようです。

大名も負けていませんでした。「遊び銀」があれば、大坂の両替屋に預けて利息を受け取っていました(年利で6%~9%)、熊本藩にいたっては、農村で備蓄されているお金も、藩の「遊び銀」と一緒に大坂に送って両替屋に預けていました(今村直樹『近世中後期の地域財政と地域運営財源…熊本藩を事例に』『永青文庫研究』、2019年)。江戸や大坂の両替屋は、こうして預かった資金を、さまざまに大名や商人に貸し付けていたわけです。

お米を作って、運んで、売る。このシンプルな経済構造では立ちゆかなくなつた江戸時代の半ばごろ、江戸幕府も大名も、利殖に活路を見いだそうとしました。「遊び銀」を保有しておくこ

とをもつたのではないかと考えることが武士たちの間でも一般的になっていたので

す。次回以降は、庶民に目を移して、彼らのたくましい投資戦術に迫っていきたいと思います。

(注1) 大坂の米商人で大名貸を営む片屋山片家の別家番頭として商才を発揮するが、懷徳堂で儒学、天文曆学を学んだ町人学者。その見識は松平定信にも知られた。

(注2) 姓は廣岡。17世紀中期頃、精米業者として創業した後、堂島米市場の米仲間として頭角を現し、そこで得た資金を大名に貸し付けることで大坂を代表する豪商へと成長した。加島銀行、大同生命保険を設立している。(注3) 18世紀において1両を米価で換算した額(日本銀行金融研究所貨幣博物館WEBサイトによる)。

高槻泰郎 (たかつき・やすお)

神戸大学経済経営研究所・准教授
1979年生まれ。慶応義塾大学総合政策学部卒業、大阪大学大学院博士前期課程修了、東京大学大学院経済学研究科博士課程修了(東京大学より博士号(経済学)を取得)。専門は日本経済史。NHK朝の連続テレビ小説『あさが来た』の時代考証を担当するなど幅広く活動。著書に『近世米市場の形成と展開 幕府司法と堂島米会所の発展』(名古屋大学出版会)、『大坂堂島米市場 江戸幕府vs市場経済』(講談社)がある。

